

海と権力

宣教師報告に見る畿内＝九州移動ルートの分析を手がかりに

The Sea and Local Powers:
An Analysis of the Kyushu-Kinai Route based on Missionaries' Reports

岡 美穂子

OKA Mihoko

はじめに

①瀬戸内航路

②アレックスandro・ヴァリニャーノの畿内巡察と瀬戸内航路

③秀吉の瀬戸内海掌握後の変化

④瀬戸内海の交易ネットワークと宗教

⑤南海路

おわりに

【論文要旨】

本稿では、16世紀に記された日本で活動するイエズス会士達の記録を手掛かりに、16世紀後半の九州＝畿内間の航路の詳細を検証する。基本的には既刊の翻訳書である松田毅一監訳『イエズス会日本報告集』を情報源とするが、原文の綴りや翻訳内容に疑義のある箇所については原文に遡って、手を加えた。これらの情報の検討の結果、イエズス会士達は主に瀬戸内航路で諸所の港に乗合船で立ち寄りながら移動していたこと、これらの港の一部にはイエズス会士が定宿とするような日本人の家があり、布教の拠点ともなったことが明らかとなる。また、頻繁ではないものの、南海路で移動することもあり、それは主に瀬戸内海の状況が戦争で不安定な時に用いられた。瀬戸内航路、南海路共に海賊は多数おり、海賊との折衝や遭遇の様子も詳細に記される。また彼等を運ぶ船乗り達、船のスベックなどについても詳細な情報がある。特筆すべきは、大友宗麟が大坂出身で塩飽を拠点とする大型船の船頭と直接契約して、宣教師を畿内へと運ばせたという情報である。この情報からも、瀬戸内海の商業航路の関係者が、相当に超領域的な活動を行っていたことが考えられよう。従来のイエズス会史料を用いた南蛮貿易研究では、マカオ＝九州間の交易についてのものが多かったが、本研究では、九州より先の日本国内、主に畿内の商人たちの南蛮貿易への関わりに着目した。とりわけ第四節では、小西家のキリシタン入信前後の状況と南蛮貿易に携わる京都商人の動きに着目し、これまでの研究では言及されなかった血縁ネットワークについても明らかにした。そこからは、京都商人の入信動機には、南蛮貿易での利益のみならず、西洋からもたらされる最先端の知識への探究心もあったことが推察可能である。

【キーワード】 イエズス会日本報告、瀬戸内海、南海路、貿易品の国内流通経路、宗教・交易ネットワーク

はじめに

本稿では、16世紀後半、キリスト教布教を目的に来日したイエズス会士達の日本国内での移動記録、とりわけ九州＝畿内間に関する情報を手がかりに、海上ルートの詳細や、それらの特徴と変遷、ひいては統一権力との相関までを明らかにしようとするものである⁽¹⁾。

宣教師は中国におけるポルトガル人の拠点マカオから渡航してくるため、東シナ海交易ネットワークの中心である九州が基本的な上陸地点となり、大村氏、有馬氏、大友氏など、キリスト教布教に好意的な領主の存在もあって、彼らの領地で布教が盛んにおこなわれた。同時に彼らの領内の港で対外交易が盛んになったのは周知のことである。とはいえ、1559年のガスパール・ヴィレラによる布教開始以来、京都や堺を中心とする畿内地方でもキリシタンの数は増加し、三箇氏、池田氏、結城氏、高山氏など、主に旧三好家臣団を中心にキリシタンに入信する者も現れた⁽²⁾。筆者は16世紀の後半、とりわけ長崎開港以来、九州にもたらされる外国産商品の国内流通は、長崎のみならず堺や京都の畿内においてもキリシタン商人が担ったと考えており、現在、実証史料の蒐集を進めている。その過程で、宣教師の移動ルートと西国の流通ルートが重なる事実が浮かび上がってきた。それは、日本の在来の宗教組織（具体的に言えば、法華宗、真言宗、禅宗等）を基盤に、信徒の商人（ヒト）や寺院（施設）によって結ばれていた既存の西国の流通ネットワークに、ある時期からキリシタン勢力が参入したことを意味する。宣教師は頻繁に畿内と九州の間を往来しているが、その移動ルートは例外なく日本の船舶である。宣教師のために船が設えられた例もわずかに存在するが、ほとんどは国内商船あるいは乗り合い型の小型船舶で移動しており、これらは基本的に人を運ぶための船ではなく、商貨を運ぶものであった。

①……………瀬戸内航路

宣教師の畿内＝九州間の移動で最も使われたのは、瀬戸内航路である。後述するように、豊後水道、土佐を經由して熊野灘を渡る南海路が利用されたこともあるが、それらはやや特異なケースと言ってよいであろう。宣教師が瀬戸内ルートを移動した際の記述をいくつか紹介してみよう。

イエズス会宣教師ヴィレラの初上京（1559年）

【史料1】「1559年11月4日、私は頭髪と髭を剃り、仏僧、すなわち日本人の司祭の衣装を着て（…）日本人2名と共に、都へ派遣された。（…）豊後から7レグア⁽³⁾のところで風が止み、水夫らは悪魔の寺院に助けを乞うため、寄付を集めた」（ヴィレラ、1564、7、13⁽⁴⁾）

上記の記述は、1559年、ヴィレラが豊後から都へ上る際に、瀬戸内航路を相乗り船で移動した際の様子である。風が止んだ際に、「悪魔の寺院 hum templo do diabo」に奉納するために乗船客から喜捨を集めたとある。おそらくこれは、当時の船乗りたちの習慣であり、仏教を「邪悪な偶像崇拜」とみなすヴィレラが喜捨を断ると、乗組員や他の乗船客の態度が一変し、次に寄港した港で下船を余儀なくされたという。

フロイスとアルメイダの旅 (1565 年)

ヴィレラの上京から6年後、畿内でのキリシタン増加に伴い、宣教師増員が決定され、1565年初頭、ルイス・フロイスとルイス・デ・アルメイダが畿内へ派遣された。この時もやはり瀬戸内航路であった。

【史料2】「降誕節から8日後(1月3日)(白杵を出発し)、伊予と称する国に到着した(…)我らは⁽⁵⁾堀江と称する港に到着した。そこが船頭の出生地であったからである(…)我らはこの堀江の港を出帆して、塩飽と称する別の港に向かい、船頭は止む無く我らを同港に運んだ。ここは豊後から堺までの道のりの半ばであり、我らはこれに6日を費やした。塩飽に上陸したが、我らを堺に運ぶ船が見つからず、同所から14里にある別の港⁽⁶⁾へ行けば必ず船があると確かな話を聞いたので、そこへ行くための小舟を借りざるを得なかった。この沿岸には海賊が数多くいるので、我らは同じ航路を行く、別の船と一緒に進んだ(…)我らは豊後から堺までのこの旅路に40日費やした(…) (アルメイダ, 1565, 10, 25)」⁽⁷⁾

このアルメイダの記述に拠れば、彼らは豊後を出発して伊予堀江⁽⁸⁾に寄港した後、塩飽、坂越の港を経て、堺に40日かけて到着したということであるが、同行したフロイスは「1565年1月27日、我らは都の手前13里にある堺の市に到着した(フロイス, 1565, 3, 6)」⁽⁹⁾と記すため、1月3日に白杵を出発して、同月27日に堺に到着、実際に要したのは24日間である。但し、豊後府内を起点にして白杵の港まで、何らかの事情で16日間かかったとすれば、40日という日数も不可能ではない。より具体的なアルメイダの記述を正とするならば、白杵から堺まで、途中船を乗り継いでも24日間という海路であった。ちなみにマカオから長崎までは順調にいけば14日程度の航路であったので、日本国内の、しかも瀬戸内海だけの移動に24日間かかるというのは、宣教師にとっては長い道のに感じられたことであろう。

京都にはヴィレラと共にフロイスが残り、アルメイダは同年5月半ば、堺から豊後への帰路についていた。この際も瀬戸内航路であったが、「5月半ば、私は堺の市で乗船したが、(…)天候に恵まれて、13日間で豊後の学院に到着した(アルメイダ, 1565, 10, 25)」⁽¹⁰⁾とあり、往路よりも遥かに早く船が進んだと言える。

布教長カブラルの第二回畿内巡察 (1574 年)

イエズス会の日本布教を統括するため、ゴアから布教長としてポルトガル人で貴族出身のフランシスコ・カブラルが来日したのは、1570年のことであった。翌年には畿内の布教状況観察と將軍足利義昭や織田信長に謁見を求めため上京したが、その際の上京経路について詳細を記した書翰は「エヴォラ版」には収載されていない。筆者はカブラルの第1回畿内巡察を詳述した1572年9月23日付書翰が本邦では未紹介であることを知り、信長謁見を含む岐阜における動向については別稿⁽¹¹⁾を著した。本研究を発表するにあたり、あらためて同書翰の手書き写本⁽¹²⁾を読み直してみると、1571年の畿内巡察に際しては、往復ともに南海路で豊後=堺を移動したことが確認された。それゆえ、第1回目の畿内巡察の航路については、後述の南海路の節を参照されたい。

さて、カブラルが2度目の畿内巡察へ赴いた際の瀬戸内航路の旅については、次のような記述がある。

【史料3】「安芸の国へ出発した。そのあたりにはよく盗賊 (ladrois) が出没するので、この旅は海路も陸路も大変危険であった。それで仕方なくある盗賊の世話になるしかなかった。彼は私達を塩飽まで連れて行ってくれることになった(後略)。(塩飽に着くと)私達はその船頭が前もって見つけておいてくれた別の小船で堺へ向かった。その途中、火縄銃と弓で武装した17隻の海賊船に取り囲まれたが(…), 品物を進んで差し出すと、彼等は私達を行かせてくれた(…) (カブラル, 1574, 5, 31)⁽¹³⁾」

ここからは、瀬戸内航路を進むために、某海上の賊の船を利用したが、その船は塩飽までしか通航を許されていなかったことが分かる。宣教師の報告では、塩飽で船を乗り換えた、あるいは【史料2】のフロイス書翰にあるように、乗り換えようとしたが都合の良い船が見つからず、他の港へ移動したという記述がかなり多く見られる。つまり塩飽諸島周辺は、西国の海上交通路としては最要所であり、九州方面から来る船も、通常はそれより先に進む習慣はなかったと考えられる。

塩飽の重要性

瀬戸内海上交通の要所としての塩飽については、多くの宣教師が着目している⁽¹⁴⁾。

【史料4】「海上には多数の盗賊が横行する時期であったが、(…) 割礼日の前日(1月13日)、都を発った。(…) 淡路の港に着くと、盗賊の船数隻が現れた(…) 塩飽は船がある唯一の港であるが、ここに到着すると、我等は先に進めぬ困難に見舞われた。というのも、彼等の正月がごく間近で、諸人は祝祭に没頭し、豊後へ向かう客も船もない上、寒さが厳しく、道中には多数の盗賊が横行している知らせが絶えなかったためである。我等の会の者が、都からの往復に宿泊することになっている家の主人が我等のために、小さな船を12、3人の漕ぎ手と共に手配したが、我等の案内を託した海賊の頭の僕が到着するまで、8日間待たねばならなかった(…) 我等は彼等の新年の前日(2月5日)、豊後国の府内のまちに到着した、(フロイス, 1578, 9, 30)⁽¹⁵⁾」

これは、ルイス・フロイスが1578年に京都から豊後へ赴いた際の記録である。旧暦の正月前後が瀬戸内海で最も海賊が横行する時期であると記されている。であるにもかかわらず、往来する船は僅かであり、おそらく法外な料金を払って、水軍に船頭を依頼する必要があった。

②…………アレックスandro・ヴァリニャーノの畿内巡察と瀬戸内航路

東インド巡察師としてローマのイエズス会総長より派遣されたアレックスandro・ヴァリニャーノが、1580年に初めて畿内を巡察した際、往復路ともに瀬戸内航路を用いている。1581年のイエズス会年報と、ヴァリニャーノに同行したフロイスの書翰は、当時の瀬戸内航路の状況について、非常に興味深い情報を供しており、ここではその詳細を検討してみたい。

【史料5】「(3月4日)、府内より日出(Fingi)へ向かって良好な天候の中、出発した。そこから広大な湾を渡るべく守江(Vorie)と称する別の港へと向かった。(…)伊予の島々まで18里を櫂を用いてわずか1日で渡った。7日を経て、塩飽の港に着いたが、この港に着く前に、能島の海賊が数名、我等の船に乗り込んだ。もし我等が兵士を同伴していなければ、我等の船を

襲う目的で艤装した船10艘をある島影に潜めていた。(…)水主は決して塩飽には入港せぬと我等に約束していたが、幾つかの理由を挙げ、期待に反して我等を塩飽の泊へ導いた。塩飽の代官(o Regedor de Xivaco)は同地に不在であった。彼は我等が畏にかかったと知れば、我等を捕えずにはおかなかったであろう。彼の代わりに、能島殿の商務官⁽¹⁶⁾(feitor de Noximadono)と毛利の官吏(meirinho de o Mori)がいて、我等の荷をことごとく陸に揚げ、縄を切った。(…)夜に入って、備後国の鞆の浦を過ぎた。(…)風がなかったので、ほとんどの時、櫂を用いた。室付近に着いた時、強い風が吹き、枝の日曜日の前の金曜日で聖週間も近いので、(室には入らず)先へ進むことにした。翌晩は我等の意に反して(淡路の)岩屋の港に入るようになった(後略)。(…)海賊らは素早く情報を聞きつけて、巡察師の船に向かい、できればこれを捕えようとしたが、このことに我等は全く気付かなかった。彼等の計画は、我等が税(津料)を支払うために入港した時、(通常は)4ないし5クルザードで済ますことができるところを、我等の素性を確かめるため、150クルザードであっても受け取らないというものであった(後略)(フロイス、1581年4月14日)⁽¹⁷⁾注 当時1クルザードは錢1,000文]

同書翰の後続部分には、この船には30人の、25歳以下の漕ぎ手が乗り組んでおり、大型かつ非常に船足の早い船であったことが記されている。また、今まで見てきたように、通常は畿内へ行くには塩飽で船を乗り換える必要があるところを、塩飽で能島水軍に遭遇して積荷検めを受けながらも、掠奪には遭わずに、そのまま塩飽を出港している。船の装備や大きさ、水軍に遭遇した際の特別措置から見ても、この船は特別な船であったと考えて良いであろう。イエズス会の1581年の年報には次のようにある。

【史料6】「(畿内のキリシタンは)ヴァリニャーノ師を迎えに豊後まで来ることを望んだ。そして彼らはフラガタ船に似た船5隻を用意させて、司祭の乗船に備えて非常によく艤装したが、巡察師は豊後国王フランシスコの大船で赴いたので、それを必要とはしなかった。ただし、師の帰還に際しては、彼らが船、その他道中に必要なもの一切を提供した(…) (1581年度年報)⁽¹⁸⁾」つまり、第1回畿内巡察に赴くヴァリニャーノを運んだのは、大友宗麟が直接手配した船であった。とはいえ、この船の大友水軍との関係は不明で、船頭は大坂出身の一向門徒であったことが同じ年報に記されている。1580年頃、大友領内では重臣田原親貫等の反乱が起き、毛利水軍もこれに加勢して国東半島に侵入してきたが、ヴァリニャーノの堺への到着は、「聖日(復活祭)の前の金曜日」⁽¹⁹⁾=4月11日(西暦)であるので、戦況が激しくなる(旧暦4月以降)直前のことであったと考えられる。この大坂出身の船頭は、塩飽を拠点にしていたが、大友宗麟と直接契約関係にあったという。

1580年の春頃は信長の太閤本願寺攻めの最終局面にあたり、和泉灘(大坂湾)には信長が西洋船を模して伊勢の船大工らに建造させた7隻の大船のうちの2隻が、西から到来する船を警戒して常駐・徘徊しており、この船は信長の船に和泉灘で追い回されたとの記述が上記のフロイス書翰(1581年4月14日付)にある。

【史料7】「(結局岩屋港には入らず)我等は堺へ直行することにしたが、信長の船は見張っていて、大船2隻のうち1隻は帆と櫂を用い、他の1隻は櫂のみを用いていたため我等の後を追いはじめ、和泉国の堺の海岸付近で我等から2里以上、風下に停泊した(…)⁽²⁰⁾」

信長の⁽²¹⁾大船

宣教師たちは、信長が建造させた7隻の大船に驚嘆したようで、折に触れ言及しているのです、それらの情報を少し紹介してみよう。

【史料8】「信長が伊勢国において造らせた7隻の⁽²²⁾フネが、堺に到着した。それらの船は日本で最も美しく、かつ大型のものであり、一見、ポルトガルのナウ船に匹敵すると思われるほどである。私はそれらを見に行き、日本においてこのようなものが造られたことに驚嘆した。信長は4年前から対戦している大坂の河口（木津川）にこれを配して、援軍や兵糧を積んだ船が一隻たりとも同所に入れぬようにするために建造させたのである。実際、これによって大坂のまちは滅亡するように思われる。信長の船は、太い砲身を持つ⁽²³⁾大砲3門を備えているが、これらがどこからもたらされたのか、私には想像もつかない。なんとなれば、豊後国主が⁽²⁴⁾鑄造させた数門の小型の砲を除けば、日本のどこにも大砲がないことを、我等は把握しているからである。私は右の大砲とその装備を見に行った。船は大型で精巧な鉄砲を無数に積んでおり（…）（オルガンティーノ、1578）」

『多聞院日記』（天正6年7月20日条）によれば横7間（幅約12.6m）、⁽²⁵⁾堅12.3間（長さ約24m）で、「鐵ノ船也、テツハウトラヌ用意、事々敷儀也」であったという。これらの船がその後どうなったかは不明とされているが、筆者はこれらの船のうちの一隻は、その後、豊臣秀吉の水軍を率いた小西行長の手に渡ったのではないかと考えている。

【史料9】「羽柴の海軍の司令官は、都生まれのキリシタンで、名を（小西）アゴステイーノと言ひ、教会の親しい友人である。彼は敵（根来衆）の出陣を知ると、直ちにおよそ70隻の艦隊を率いて、堺の前に来た。彼は、我らのガレオン船に似た船に乗り、これには多数のモスケツト銃と、豊後の国主が信長に贈った大砲を一門備えてあった（…）（フロイス、1584、8、31）」⁽²⁶⁾

【史料8】のオルガンティーノの書翰にもあるように、当時、日本で大砲の鑄造に成功していたのは大友宗麟だけであり、信長の船に搭載された大砲の出自は彼等にとっては謎であった。【史料9】からは、宗麟が信長に大砲を贈っていたことが明らかになるので、宣教師が存ぜぬまでも、信長の大船に備えられた大砲は大友領内で鑄造された可能性がある。一方で1585年の秀吉の雑賀攻めに関するフロイスの記録では、行長の率いた船には「大型のマスカット銃、信長が伊勢国でシナ人に鑄造させた良い大砲一門（1585、10、1）」が搭載されていたとあり、信長は宗麟から贈られた大砲以外にも、自身が伊勢で中国人に鑄造させた大砲を所有していたことが分かる。【史料8】の信長の船と【史料9】の小西行長が使用した船には、「大砲」「洋船」という共通した特徴があり、信長の威信を示す宝でもあった大船を秀吉が入手して、小西行長に使わせていた可能性は十分に考えられる。

なお、大友宗麟が自領で大砲鑄造に成功していたことは、ほとんど知られていない。2010年に東京大学史料編纂所の在ロシア日本関係史料調査チーム（保谷徹代表）がサンクトペテルスブルグで調査していた折、ロシア国立軍事史博物館において、大友宗麟が用いていた印とほぼ同型の「FCO」のマークが彫られた大砲を発見し、メディアで大きく報道された。その際に、この「FCO」のマークが大友宗麟のものであることを指摘したのは筆者であったが、その当時は、大友宗麟がインドやマラッカのポルトガル人の大砲工場に発注して造らせたものではないかと考えていた。しかしながら、⁽²⁷⁾上記の情報や近年の研究状況から、このサンクトペテルスブルグの大砲は、大友領内で製造さ

れ、西洋の大砲の大半が鑄造者（工房）名を入れるのと同様、大友宗麟のマークが入ったものと考えられるべきであろう。

大友船を狙う海賊たち

さて、大友宗麟が特別に仕立て、瀬戸内の水軍も容易に手出しできなかったヴァリニャーノに乗せた船であったが、播磨灘まで差し掛かると、先述の信長の船含む多数の海賊船が周辺に現れた。というのも、「堺を臨みつつ進んでいた時、我らは日本において南蛮と呼ばれているが、その南蛮の伴天連の長が数多の財宝を携えて通過するとの噂が流れ、常に同海（瀬戸内海）を横行している海賊が多数集結した（1581年度年報⁽²⁸⁾）」からである。

結局、大友船は30人の若い漕ぎ手を動員して、「飛ぶように」堺の港へ到着したが、海賊たちはなおも追いかけてきて、結局、堺の商人たちの交渉によって、150クルザードを支払うことになった。注目すべきは、堺の港には、日比屋了珪をはじめとする堺の商人たちが船の到着を港で待ち構えており、船荷が守られるように、海賊たちと諸々の交渉をおこなったという点である。この大友船には、ヴァリニャーノが信長のために持参した献上品のみならず、堺商人たちが目当てにした輸入商品が大量に積載されていたのではなかったろうか。

主に長崎に齎される南蛮船の品々の中でも、生糸と金はイエズス会が中心になって日本国内の流通ルートに乗せていた。イエズス会の記録に拠れば、豊後領内の港にポルトガル船が入港したのは1560年が最後であるが、陸路（豊後街道）や玄界灘を通る海路で九州西部と繋がっており、イエズス会の一大拠点であった豊後府内に、長崎に到着して瀬戸内航路で畿内へ向かう商品が、積み出しのために集積していたと想定することは可能である。長崎の中心部にはかつて「豊後町」という町名もあり、長崎には豊後出身の商人が少なからず居住したと考えられている。すなわち、ポルトガル船が直接来航しないからと言って、大友氏が貿易から遠ざかったのではなく、瀬戸内航路を通じた九州＝畿内のルート上、輸入商品の積み出し港として多くの商品を差配することが可能であったと考えられる。それゆえ、ポルトガル船の来航が途絶えたことを豊後領内の南蛮貿易の終焉と考える必要はなく、南蛮船が齎す日本国内の集散港としては、17世紀初頭まで機能し続けたと考える余地もあろう。

肥後高瀬の重要性

九州西岸のイエズス会の活動地域は島嶼や沿岸地帯に集中していたため、西岸での移動そのものは海路が中心である。その海路から九州本島への陸路に入る際のターミナル的な役割を担っていたのが肥後高瀬の港であると考えられ、イエズス会の記録には高瀬の記述が頻繁に登場する⁽²⁹⁾。

【史料10】「枝の祝日の前日（3月18日）、高瀬の町で大村行の船に乗るため、秋月を發った。聖週間の月曜日（3月20日）に、高瀬で乗船した。高瀬を出ると、強い逆風が吹きつけたので、高瀬から3里の入り江に避難した。これは同所から7里離れた有馬国主が領する他の地域に渡るためであった（…）高瀬には、私が常に宿としていた家があり、そこからその町にいた他のキリシタンらに伝わった。彼等は島原や口之津の商人で、船に米を積み、口之津に向けて出帆する準備を整えていた（…）北風が吹き始めたので、高瀬から口之津へ、キリシタンの大船

2隻で出発した(…) (アルメイダ, 1570, 10, 25)⁽³⁰⁾」

これは、1570年にルイス・デ・アルメイダ修道士が、秋月から大村へ向かうため、高瀬で船に乗った際の記録である。ここからは、高瀬にはイエズス会の定宿があったこと、島原や口之津の商人が九州本島で生産されるコメを高瀬から島原半島部に運んでいた様子が記されている。この記述の前後には、アルメイダが海賊に追われ、略奪された様子が記されているが、島原半島周辺の海上には海賊が出没することは、他の宣教師の書翰にも記されている。同じアルメイダ書翰には、口之津からふたたびアルメイダが豊後へ向かう様子が記されており、やはり肥後高瀬まで海路、その後、陸路で豊後の日田を目指している。

③……………秀吉の瀬戸内海掌握後の変化

織田信長が本能寺の変（西暦1582年6月21日）で没し、その後秀吉が中国、四国を続けて平定すると、瀬戸内海の状況にも変化が齎された。とくに代表的なのは「海賊停止令（1588）」に代表されるような瀬戸内の流通ルートの掌握と海上交通の安定化を図る法令であるが、実際には秀吉は四国平定（1585年）の前には小西行長を秀吉政権の舟奉行にして小豆島を安堵し、瀬戸内海賊たちの勢力削減と統制に力を入れ始めている。そのような変化は、小西行長と親交のあった宣教師たちにも機敏に察知されていた。

【史料11】「(…) 名を能島殿（村上武吉）といい、非常に強力なため、その沿岸や他の諸国の沿岸地帯では、彼を恐れて毎年貢物を送っている。我等の司祭や修道士たちは、これらの海域を絶え間なく航行しているので、彼等の掌中に陥る危険がある。副管区長師（ガスパール・コエーリヨ）は、我が会員がたとえ彼の手下に捕らわれても、掠奪されたり危害を加えられないよう、安全通行証を、彼に会ってもらうことを望んでおられた。今回豊後に向かっていて、その城から1, 2里の所まで来たので、司祭は一人の日本人修道士を彼のもとに送り、彼の好意と先に述べた自由通航を求めたところ、彼は丁重に修道士を迎えて歓待し、食事に誘ったので、先の要請を繰り返したところ、彼は、司祭たちは天下人の関白殿の好意を得ているので、彼の好意は必要ない、と言った。それにもかかわらず、修道士が司祭たちへの庇護を請わなければならない理由を述べて押し返したところ、彼は、彼の紋章と印のついた絹の旗を修道士に与え、疑わしい船に出会ったら、これを見せるように、と言った（後略）。（フロイス, 1586, 10, 17）」⁽³¹⁾

上の部分は1586年、イエズス会の副管区長ガスパール・コエーリヨらが長崎から下関経由で瀬戸内航路を用いて上京し、大坂城で秀吉と謁見した後の帰路の記述で、村上武吉に関する詳細な記述としてよく知られる。同年5月4日（和暦）付で、秀吉はコエーリヨ等に日本国内での布教許可状を与えている。⁽³²⁾

村上水軍は、「通航許可証」として、その印の入った旗を金銭と引き換えに与える習慣があったことが知られている。宣教師達は、村上水軍の旗が瀬戸内海を航行するのに有益であることを知っており、その入手を試みたのであろう。この航海は1586年8月におこなわれており、1583年の毛利氏との和議、1585年の四国平定を経た後の状況である。それゆえ、中国、四国地方はすでに秀吉の軍門に下った状況であった。村上水軍の安全通行証を求めたところ、イエズス会は秀吉と懇意にし

ているから不要である、という村上武吉の発言は、いわゆる「海賊停止令」よりもっと早い段階から、瀬戸内海の家臣は秀吉の統制下に入っていたことを意味する。

コエーリョ一行は往路復路ともに、小西行長の庇護を受けていたことも明らかである。

【史料12】「1586年3月6日、長崎を出発した。(…)我等は下関に着いた(…)我等はそこ(下関)を發つて、山口の国の上関という名の港に向かったが、道のりは35里であった。(…)そこ(上関)から、日本では有名な塩飽に向かって出発したが、堺には我等がそこに行くという知らせが届いていたので、アゴスティーノ(小西行長)殿が、何人かの家臣を、我等を迎えるための船と共に送って寄こした。室に着くと、同地はアゴスティーノ自身の良港であったので、彼に代わって同地を治めている兄(小西如清)が、我等を迎えに出た。(…)この港から、我等は明石に向かった。ここに(高山)右近殿の父のダリオと母のマリア、並びに右近殿に仕えるすべての身分の高い士族が居を定めている。(…)風が航海に適していたため、司祭は長くは留まらずに航海を続けて、その日のうちに兵庫の港に着き、また翌日に堺に上陸した(…) (フロイス, 1586, 10, 17)⁽³³⁾」

この往路の情報からは、宣教師が停泊した瀬戸内の港が、小西氏や高山氏の知行となっていたと分かる。この時期に秀吉政権下で小西氏が瀬戸内海を管理し、播磨灘と和泉灘を繋ぐ要所である明石も高山右近の領地であったのは偶然ではなく、秀吉にはキリシタンの武将に瀬戸内航路を管理させる明確な意図があったと考えるべきではないだろうか。復路に関しても、コエーリョ一行は小西行長が艤装した船で瀬戸内を九州へと下った。

【史料13】「(小西行長は)豊後に副管区長を運ぶための2隻の船を、船員付きで自分の負担で準備するよう手配し、(…)堺を1586年7月23日に発ち、司祭らを例の島(小豆島)の前まで伴い、牛窓という名の、そこもアゴスティーノの領地であるところに下ろした。(…)副管区長師は、出発後、日本で最大の海賊が住む幾つかの島のところへ至った。その海賊(能島水軍)は、そこに大きな城と多くの家来、土地、およびいつも自由に動き回る船を持っている(…) (フロイス, 1586, 10, 17)⁽³⁴⁾」

このような待遇は、コエーリョが日本イエズス会の首長であったからではなく、この時期、他のイエズス会士の瀬戸内海往来にも、少なからず小西行長が手を貸していることが明らかである。たとえば、江戸時代に副管区長職に就任することになるフランチェスコ・パシオが1585年に上京する際、行長は非常に手厚く船旅を整えた。

【史料14】「(…)7月6日、我らは佐賀関を出発し、塩飽に12日に到着した(…)風であったため、常時槽で進んだ。ここ塩飽で、水軍司令官アゴスティーノ殿(小西行長)は、当地の異教徒の殿に、私がここに到着したら、室へ行くよう船を与え、大いに歓待するよう頼んでおり(…) (行長に会うため)日比という名の地に着いた(…)我らは塩飽から10里の牛窓に着き、明日はさらに10里先の室へ行くことになっている(…) (パシオ, 1585, 7, 13)⁽³⁵⁾」

日比の港で小西行長に遭遇したパシオは、行長について次のような言及をおこなった。

【史料15】「アゴスティーノの勢力、および身分は、私が考えていたより実際には遥かに大きい。というのは、彼の命令は広く及び、皆から懼れられており、今や羽柴は全軍を土佐の国に渡す仕事を彼一人に任せ、この渡海には1000の船を集めたと言われる(…) (パシオ, 1585, 7,

⁽³⁶⁾
13)」

小西行長がキリシタンになったのは1584年のことである。いくらキリシタンとはいえ、四国平定の準備真っ只中の行長が単独の意志で瀬戸内海を航行するイエズス会士に船を特別に与えていたとは考え難く、バシオの上京時期が四国平定の開始時期にちょうど重なっているだけに、平定後の瀬戸内海流通ネットワークを見据えた秀吉の戦略の一環としての厚遇ではなかったかと考える。

先述のガスパール・コエリヨの上京中（1586年）、秀吉は5月4日、宣教師一行を大坂城に招待して歓待し、明と朝鮮の征服計画等々について親しく語り合っている。⁽³⁷⁾この時点では、翌年に出される「伴天連追放令」の気配は微塵もなく、大坂城での対話の内容からは、南蛮貿易と少なからぬ関係を持つ宣教師たちを、如何にして自らの権力機構に取り入れるかを模索する秀吉の野心が大いに見えているのである。

下関の布教拠点化計画

秀吉の中国・四国平定後、瀬戸内海は初めて地域権力だけではなく、「天下」の権力も介入しうる海路となった。有名な「海賊停止令」以前にも、瀬戸内海の家賊に対する禁止行為を、秀吉は明言している。⁽³⁸⁾フロイスの1586年の年報では、「我等は下関に着いたが、ここは豊後、ミヤコ、および下（九州）より船が集まる中心の港で（後略）（フロイス、1586、10、17）」⁽³⁹⁾とあり、前掲【史料2】のように、必ず塩飽周辺で船を乗り継がねばならないような状況から一変しているといえよう。

「一つの海」になった瀬戸内海を通じて、畿内を拠点とする統一政権が外国からの輸入商品をより確実に入手しようとすれば、貿易船が来航する港は、長崎のような九州の西岸よりも、瀬戸内海に面した九州東岸か、あるいは寧ろ、本州の西端の方が都合が良い。その中で着目されたのが、古くから対外交易の要であった「下関」である。鎌倉時代には「赤間関」と呼ばれ、朝鮮や中国との通交の窓口になっていた。⁽⁴⁰⁾九州仕置き直前、豊後のイエズス会を破格の条件で山口、下関に移動させる計画が、おそらく秀吉の意向を受けた小寺官兵衛によって持ち上がっている。

【史料16】「小寺官兵衛殿が下関につき、この交渉を促進すると、数日のうちに目的を達成し、望んでいた三か所の司祭館だけではなく、司祭達や聖なる教えの大いなる布教のための基盤、端緒となる他の特権や恩恵を獲得した（…）毛利殿と小早川殿も共に、それらの土地を永代にわたって（イエズス会に）与え、領内の他の人たちが払っているすべての税を免除し、兵を宿泊させる義務も、日本の習慣によって仏僧らにも課せられている町内の役務さえも免除した（…）」⁽⁴¹⁾（フロイス、1588、2、20）」

この記述は1586年のことで、いわゆる「豊薩合戦」で大友氏の敗北の色が濃くなり、その存亡が危ぶまれていた時期である。イエズス会史料を読む限り、この山口への移動は、彼ら自身の希望であったが、戦乱の最中、最終的に65人に及ぶ豊後のイエズス会とその家財道具を運び出す手段を見いだせず、官兵衛の斡旋の元、1586年末、塩飽の大船2隻で山口へ渡った。

すでに秀吉に下っていた毛利、小早川氏は、秀吉が九州仕置きの先鋒として北九州に派遣した小寺官兵衛の意向を尊重する傾向にあったと考える。この時期、小寺官兵衛の勧めで、小早川（毛利）秀包がキリシタンに改宗している。⁽⁴²⁾秀包の正室は大友宗麟の娘マセンシアであり、この間にできた子らは吉敷毛利家や阿川毛利家の祖となり、江戸時代以降、長州藩の毛利家を一家老として支え

ていくことになる。小早川秀包は毛利の嫡流ではないので、長崎の大村純忠と同様には考えられないが、それでも毛利元就の庶子が改宗した背景には、山口、下関がイエズス会の布教拠点となることで、おのずとポルトガル人の船が来航する可能性を見越していたことに拠るのではなかったろうか。

④……………瀬戸内海の交易ネットワークと宗教

中世の日本の交易ネットワーク（ヒト・モノの移動）が、仏教宗派のネットワークに相当依拠するものであることは諸先学によっても指摘されてきた。たとえば、南海路として知られる薩摩と泉州堺を結ぶ外洋航路では、主要な港町に、真言宗系の大寺院がほぼ必ず存在する。これらの寺院は宗教施設であると同時に、「寺内町」のように商業的な機能を有していたと考えられる。

中世瀬戸内海の各浦には真言宗の寺院が存在し、海に生きる民の社会経済基盤とも密接に繋がっていた。但し、16世紀初頭から三好政権期にかけては、堺を中心に瀬戸内まで法華宗がかなりの影響力を持ったことを豊田武氏、脇田修氏⁽⁴³⁾が指摘しており、とくに16世紀後半には、法華宗日隆門流の寺院と商業のネットワークが瀬戸内海から種子島まで繋がっていたことが天野忠幸氏に指摘されている⁽⁴⁴⁾。これは中世の京都の有力商人に法華宗徒が非常に多く、法華一揆の戦禍にともなって、本山本能寺の機能が堺の顕本寺に移されたこと、洛中での一時的な法華宗禁教により、京都の法華宗徒が泉州堺に移動してきたことなどもその背景にある。

小西家の宗派

豊田武氏は、三好政権下に堺でも会合衆を中心に法華宗が全盛となるものの、15世紀末の石山御坊の造営、堺の信證院造営（1476年）等を契機に、堺商人と一向宗首脳部との取引が増え、小西党など、本願寺の「御用商人」的な立場の商人が台頭してきたと述べる⁽⁴⁵⁾。豊田氏の論に依拠したと思われる川村信三氏⁽⁴⁶⁾なども、堺の日比屋一族が瀬戸内海に真宗ネットワークを展開した可能性を指摘する。豊田氏や川村氏が依拠するのは、本願寺と堺の小西党の商取引に関する史料であり、小西一族が凡そ真宗門徒であったことそのものを示すものではない。実際に、この時期、香川県の一部地域以外に真宗が浸透した気配はなく、水軍等の海の勢力への影響はなく、ネットワークと言えらるほどのものはなかったと考えるべきであろう⁽⁴⁷⁾。

筆者は、秀吉政権下で瀬戸内海を統括した小西行長の父、小西立佐は法華宗とも深い繋がりを有していたと考えている。小西立佐に関しては、フロイス『日本史』に、「都の最初のキリシタン⁽⁴⁸⁾のひとり」とあり、イエズス会関係の記録全般にも「都の人（京都商人）」という形容で登場するため、堺の小西党とは親戚関係にあっても、堺が地盤というよりはむしろ京都を主に活動する商人で、キリシタン入信前は、法華宗信徒であったとして不思議はない。

1579年に安土城下で信長が浄土宗の僧と法華宗の僧を宗論で戦わせた「安土宗論」に関するイエズス会の記録（1579年オルガンティーノ書翰）では、敗北者の法華側で、賠償金を支払った有力商人の中に「リウサのうちの一人 hum de Riusa」という者がいたことが記されている。この者は、後に安土宗論について見聞したことをオルガンティーノに話しており、Riusaについて特に説明もな

いことから、日本にいるイエズス会士なら誰でも知っている「リウサ＝立佐」であったと考えるべきであろう。「hum de Riusa」という表現は、「立佐」の「家人」という意味もあるが、同書翰の後述に、「リウサの息子」が命からがら安土から逃げたことが記されるため、法華側の信徒として賠償金を支払ったのは、「小西立佐の息子」であったと考えて良いであろう。

この「立佐の息子」とは、誰であったろうか。次男とされる小西行長は当時宇喜多家の家臣であり、1579年時点で畿内にいる可能性は薄い。とすれば、京都で小西家の商いに専従していた長男の如清ではなかったかと考える。この「安土宗論」には、法華宗側の代表僧として、堺の油屋常言の⁽⁴⁹⁾息子日⁽⁵⁰⁾と⁽⁵¹⁾同じく油屋出身の妙国寺僧普伝が含まれていた。

オルガンティーノ書翰の後続箇所には、信長の手勢は「堺にはより大きな富があるため、さらに重い罰を加えるべく同地に向かった」とあり、「法華宗徒の誅伐」を理由に、「石山本願寺とも懇ろな」堺に連なる商人たちを制裁しようとした可能性が考えられる。オルガンティーノは、「(法華宗の)多くの信徒は宗旨を変えたがっているが、願わくば、我等の主が選ばれし者を我が清き真の教えに帰依させ給わんことを」と法華宗からの改宗者の見込みを示している。小西如清がキリシタンになったのは、1579年のことであり、この「安土の法難」を受けてのことであったと考えるのが自然であろう。

謎の京都商人「ヌマズ」

オルガンティーノの書翰には、「立佐の息子」のほかに、安土宗論に同席し、のちにオルガンティーノに顛末を語った一人に、「尊師（書翰の宛所のフロイス）が知っているマズ」という謎の人物が登場する。エヴォラ版原文を確認したところ、「hum Mazu」とあり、Mazuという集団の一人とも読めなくもないが、文意不明である。オルガンティーノ書翰は、エヴォラ版に収載されたもの以外、原本も古写本も現存しないため、原文を確認する術がないが、手書き古文書では、数字の「1」にあたる「hum」はしばしば「hū」と記される。たとえば原文に「Humazu」と見えるのを、エヴォラ版製作者が「hum Mazu」と読み違えた可能性を考えれば、筆者には思い当たる人物がいる。フロイス『日本史』に登場する南蛮貿易でイエズス会から便宜を囿られたのを契機に、イエズス会と昵懇の間柄になった法華宗徒の京都商人「ヌマズ」である。文字の形として、「H」と「N」は似ており、日本人の姓名などには疎いヨーロッパ在住の印刷業務に携わる修道士たちが読み間違えたとしても不思議はない。

【史料17】「都には法華宗の異教徒で、ヌマズ (Numāzzu) という者がいた。彼は司祭たちから、シナ船が来る港で受けた幾つかの好意のお陰で富裕になっていた。(フロイス第4巻 307ページ 44章)」

この後に、「ヌマズ」が法華宗徒であるにもかかわらず、イエズス会宣教師たちに好意的で、1574年に布教長カブラルが上京した折に、自宅で歓待したことが記されている。たまたまカブラルの京都滞在中に、「ヌマズ」がポルトガル人商人に売った「金の扇子」の売上金120クルザードが九州から送られてきて、うち半分をイエズス会に喜捨したことも記される。この『日本史』の記述からは、法華宗の商人「ヌマズ」が継続的に南蛮貿易に参加した事実を伺うことができる。

『日本史』訳者の松田毅一、川崎桃太氏は、この京都商人「ヌマズ」を比定不能としている。筆者

はこれより少し後の時代に、曲直瀬道三の養子玄朔の娘婿として、曲直瀬流医術を継承し、曲直瀬養安院家を興して江戸幕府に仕えた曲直瀬正琳の娘が沼津乗賢という人物に嫁していることを確認した。正琳の息子正円は子を得ないまま没したため、沼津乗賢と正琳の娘の間の子である玄理が正円を継ぎ、以後、曲直瀬養安院家は曲直瀬＝沼津家として知られるようになる。⁽⁵²⁾ 曲直瀬玄理の生年は1604年であるため、常識的に考えれば、沼津乗賢は1580年前後の生まれであると想定され、1574年の時点で商人として活躍しているはずはない。しかし、老齡の曲直瀬道三が1584年にキリシタン⁽⁵³⁾に入信したことを考えると、キリシタンという繋がりでは、沼津乗賢の一世代前の縁者沼津某が、このイエズス会と昵懇にした京都の南蛮貿易商人「沼津」である可能性は大いに有りうるのではないかと考える。

沼津乗賢なる人物については詳細不明であるが、江戸幕府の典医として活躍した息子玄理（1604～1667）の初名は「乗昌」である。奇しくも安土桃山時代の狩野永徳の門人に沼津乗昌という名の絵師がおり、屏風製作に長け、「一家を成し（工房を持つ）」たことが知られる。朝廷献上の屏風も多く手掛けたことから、「屏風絵所」、「沼津屏風」と呼ばれた。フロイスの『日本史』に登場する京都商人「ヌマズ」は、金の扇子を南蛮貿易で輸出していたことから、「金箔工芸」という共通項も見られる。⁽⁵⁴⁾ 絵師の沼津乗昌は、寛永18（1641）年に没し、京都の本能寺（法華宗本門流）に葬られた。

絵師の沼津乗昌と後に曲直瀬玄理となる沼津乗昌は、没年、活躍の場、菩提寺等も異なるので、同一人物ではなかろう。とはいえ、この時代、血族内で同姓同名を名乗ることは屢々ある。絵師の沼津乗昌の情報を追っているうちに、その唯一の確認できる作品が「曲直瀬字三世像」のうち、「東井先生」像であると知った。「東井先生」とは、曲直瀬玄朔（1539～1632）のことである。「曲直瀬字三世像」のうち残る二点は狩野貞延筆の「一溪（初代道三）先生像」と狩野常信（1636～1713）筆の「玄淵先生像」⁽⁵⁵⁾である。これらは戦前に放射線医学者で医学史の研究者でもあった藤波剛一氏の所蔵であったが、三点各々、制作年代、絵師共に異なる。曲直瀬道三の肖像を描いた狩野貞延については、管見の限り、他の作品は現存せず、『古画備考』⁽⁵⁶⁾巻下（40）には、文亀4（1504）年生まれとあり、江戸時代においても知られる作品は、上記の「一溪（初代道三）先生像」のみであった。つまり曲直瀬道三像、曲直瀬玄淵像ともに、絵師と肖像画の人は同時代の人物であり、曲直瀬玄朔像を描いた絵師の沼津乗昌もまた、玄朔と同じ時代（16世紀中葉から17世紀初頭）に生きた人物で、親しい間柄にあったと見るべきであろう。すなわち、曲直瀬玄朔像を描いた沼津乗昌は玄朔と直接の面識があり、玄朔の孫娘にあたる人物が、沼津乗賢なる男性に嫁ぐのは偶然にしては出来すぎで、乗昌と乗賢は近親者であったと考えるべきである。各世代に渡って交流があることから、沼津家と曲直瀬家は縁者もしくは非常に親しい間柄であったといえよう。

フロイスの『日本史』に登場する京都の金箔工芸を扱う「ヌマズ」は「商人」として登場するが、沼津乗昌は職人を抱える絵師であったから、「工房」の主宰者として、そこで制作される工芸品を商っていたとしても不思議はないように思われる。沼津乗昌の菩提寺は本能寺であるので、「法華宗」というキーワードも意味を帯びてくる。

沼津乗昌の本姓は「瀧野」であったとされる。⁽⁵⁷⁾ 慶長18（1613）年に仙台藩主伊達政宗がフランシスコ会宣教師ルイス・ソテロを正使、支倉常長を副使としてヨーロッパへ派遣した一行の中に、京都出身の「トマス・タキノ・カヒョウエ」という人物がいる。秀吉による実質的な最初のキリシタ

ン弾圧である「26 聖人殉教事件（1597年）」で処刑された人物の縁者で、その列福運動を目的とした参加であった⁽⁵⁸⁾。京都出身で「瀧野タキノ」という姓に注目すれば、この人物もまた、「ヌマズ」の縁者であったかもしれない。また「タキノ」と共に支倉使節に参加した狩野道味も狩野派一門で、『古画備考』巻下⁽⁵⁹⁾（41）では、沼津乗昌、狩野道味共に、「古右京」すなわち狩野光信に師事したことがあるとあり、乗昌と道味は面識があったはずである。こうして、曲直瀬＝沼津一族、狩野派との関りを見ていくと、京都の工芸集団と知識人、さらにはキリシタンとの関わりが暗闇の中から浮かび上がってくる。

小西如清と思われる人物と共に、安土宗論において、「ヌマズ」が法華宗の信徒代表として同席していること、法華宗側の僧侶に堺の油屋出身者が少なくとも2名も含まれていることを考えると、油屋＝小西（京都）＝沼津の間には、何らかの縁戚関係があったとしても不思議はない。従来、日比屋と小西（京都）の縁戚関係は先学によって指摘されてきたが⁽⁶⁰⁾、堺と京都、法華宗という繋がりにおいても、小西（京都）は、日比屋以外とも様々な繋がりを持っていた可能性が考えられるのである⁽⁶¹⁾。

ポルトガル人の船で九州に齎される商品は、基本的にはイエズス会と付き合いのある日本人商人を通じて国内の流通ルートに乗せられた。これらの商品は主に堺を経由して、一部は京都まで運ばれたと考えられる⁽⁶²⁾。これらの流通ルートに関わる商人は、たとえキリシタンに入信せずとも、宣教師らと穏便な関係を維持する必要があったはずである。こういった事情から、貿易都市長崎の商人たちは、概ねキリシタンに入信したのであった。

⑤……………南海路

カブラルの第1回畿内巡察（1571年）

以上では、畿内＝九州間の主力ラインであった瀬戸内航路に関する様々な情報を取り上げてきたが、主に薩摩＝堺を結ぶ南海路に関しても、イエズス会の情報があるため、取り上げてみよう。

瀬戸内航路と比して、イエズス会による南海路の利用は極めて限定的であり、さらには南海路を用いた布教長フランシスコ・カブラルの第1回畿内巡察（1571年）を報じるカブラル書翰がエヴォラ版には収載されず、マドリッドの王立歴史学士院図書館に所蔵される唯一の手稿写本は、本邦では部分的な利用にとどまるため、その行程の詳細はほとんど知られずにあった。ここでは、カブラル書翰に見られる南海路の詳細を抽出し、堺までのその旅を再現してみたい⁽⁶³⁾。

カブラル一行は、1571年10月21日、豊後臼杵港から、生糸を積んで南海路で堺へ向かう船に乗った。通常用いる瀬戸内航路を断念したのは、「戦乱のため」と「多くの海賊がいること」が理由であった。1571年当時、瀬戸内海は、村上水軍の長である村上武吉が備前の浦上宗景と結んで、毛利家から離反する動きがあり、それに乗じて、阿波の篠原長房が児島に上陸してくる等、紛糾状態にあった。秋ごろには、毛利軍と宇喜多＝浦上軍が、陸上、海上で衝突し、大規模な戦闘状態にあったことが確認される。

臼杵を立ったカブラル一行は、伊予の一港（詳細不明）を経て、四国を沿岸伝いに南下して、土佐の清水湊に入港した。その後も土佐の複数の港に入港している。そのうちの一つに関しては、「戦

乱状態にある地域の港」と言及されることから、長曾我部氏と一条氏が争っていた地域と推定され、幡多の下田湊の可能性が高い。土佐の記録としては、足摺岬の金剛福寺と思われる真言宗の巨大寺院についての詳細な言及がおこなわれていることから、この寺に立ち寄った可能性もある。

また熊野灘を渡った先の紀之湊では、根来衆の財力についての観察も怠っていない。紀之港への入港を経て、12月15日、堺の港に到着した。つまり、豊後から堺への南海路での旅には2か月を要したことになる。カブラルの書翰には、真言宗系の寺院の記述が散見され、また通常の南海路であれば、土佐の足摺岬の先は、鹿児島島の坊津で、坊津一乗院は大陸との交易拠点としての機能も備えた真言宗の大寺院であったので、南海路における真言宗ネットワークの存在は強固なものであったと言えるであろう。

カブラルは帰路も南海路を採ったが、その旅程の詳細は不明である。往路復路ともに、薩摩領の港は経由していない。つまり必ずしも薩摩を経由せずに、豊後から堺に至る南海路も存在したということになる。

ヴァリニャーノの第1回畿内巡察（1581年）

本稿第二節では、東インド巡察師ヴァリニャーノの畿内巡察の往路、大友氏が契約した船で瀬戸内海を辛くも横断したことを述べた。この旅の帰路では、「海賊のため、また毛利の所領を再び通過せぬために、四国の島々の外側を進み、これには一ヶ月を費やしたが、日本の船が不便であることのほか、数回激しい暴風雨に見舞われた,..」とあり、それが南海路であったことを示している。この時、ヴァリニャーノは、堺から乗船して土佐に入り、一条兼定と対面している。さらには日向の一港に入り、さらにそこから薩摩まで船で行き、複数の薩摩の港に出入りしたことが分かる⁽⁶⁵⁾。この船は堺商人たちの船であったが、寄港地の一つは坊津の港であったことが次の史料から推察される⁽⁶⁶⁾。

【史料18】「長崎のジュスティアーノ（堺商人）の一子ルイスの身にあることが生じたが、(…)すなわち、その青年が堺へ行く時、薩摩国の坊の港（No porto do Boo do reino de Saçuma）に数日逗留した。異教徒の寺院を見るために宿泊先の家主と共に同所を巡り、偶然、神の社に行き着いたが、そこに神官たちが現れた。彼らはルイスに向かって、南蛮のつかさ（Çucaca do Nambam）、すなわちインドの巡察師（ヴァリニャーノ）が都から来て、当地を通過した時に（後略）（フロイス、1584、1、20）」

ここからは、坊津の港の寺院内⁽⁶⁷⁾にある神社の神官たちがヴァリニャーノと遭遇したことが分かる。とはいえ、ヴァリニャーノが入港したのは、薩摩の一港ではなく、複数の港であったのは不思議である。船は堺商人の船で、各々の商務があったとはいえ、薩摩に用がないのであれば、どこか途中の港で待機することも可能であったはずである。ヴァリニャーノが、キリシタンのほとんどいない薩摩の諸港をあえて訪問しているのは、それらの港で行われている取引や、港の状況を観察する意図があったと考えるべきではなかろうか。その背景には、1570年代後半に、おそらくポルトガル船の来航誘致を目的に、島津義久が領内布教を求めたことが関係していると思われる。義久の先代の貴久もまた、1560年代初頭に宣教師の招致と布教許可を出していたが、同時期に大村純忠の入信と横瀬浦開港があり、島津氏は南蛮船招致合戦に敗したとも見られる。

【史料19】「薩摩の国主（島津義久）は、彼が居住する市に教会を建てることを許し、また、そ

のための地所と、望む者にはキリシタンとなる許可を与え、山川と称する町の住民から始めるようにと言った（ミゲル・ヴァス、1577、10、27）⁽⁶⁸⁾」

修道士ミゲル・ヴァスは、1577年、島津氏からの招聘により、薩摩へ赴いた。その際に島津義久と面談し、上記のような申し出を受けたのである。続いてバルタザール・ロペスとルイス・デ・アルメイダが薩摩に派遣されたが、同年のアルメイダ書翰には、薩摩滞在中であることが記されるのみで、島津氏との交渉については不明である⁽⁶⁹⁾。

ヴァリニャーノの旅を報じる1582年の年報でも、「巡察師（ヴァリニャーノ）が都から来て同（薩摩）国のいくつかの港を通った時、司祭は国主と親交を結ぶために幾らかの進物を持たせて人を彼の許に遣わし、副管区長もまた数回同じようにした。（中略）この事業（鹿児島での改宗事業）がいかに重要であるか、この（書翰）で詳しく語ることはできないが、巡察師は本件をよく承知しているので、彼が総長猥下に報告できるであろう⁽⁷⁰⁾」と記されている。この文の前後では、薩摩の島津家は豊後の大友家に勝る大国であり、交通の要所でもあることから、布教拠点にふさわしいという主張が繰り返されている。巡察師ヴァリニャーノが直接イエズス会総長に伝える重要案件であるという文脈からも、長崎がイエズス会の寺社領となった直後でも、安定した布教拠点構築のために、つねに機敏な危機管理意識のもと、日本イエズス会が日本の政治状況を観察して行動していたことが明らかである。

おわりに

当初、本稿の目的は、宣教師報告に見られる日本の海上交通に関する情報を横断的に抽出することに過ぎなかった。しかしながら、結果的には海、すなわち海上交通、流通を掌中に収めようとする「権力」の姿が所々浮き彫りにされた感がある。瀬戸内海の水軍たちの勢力範囲、それらが毛利氏に淘汰・吸収され、統一権力に収斂されていく過程の重要な局面が、スポットライトを浴びる形で浮かび上がったともいえよう。

宣教師が海を移動する際の情報が、間接的に「海と権力」に関する情報に重なるのは偶然ではない。おそらく16世紀後半の日本列島が、海上交通や流通の実態において、わずかな例外を除き、基本的には領国単位、商人集団単位であったものから、ネットワーク的かつ広範囲にわたる躍動的な「ルート」形成への移行期にあったことが関係しているのではないかと考える。そのルート上にあった地域権力やそれらを包摂した統一政権は、流通路やネットワークの具体的な掌握に並々ならぬ関心を持っていたことが、宣教師の海上移動体験からも推察することができるのである。

本稿では、主に瀬戸内海を通じた、堺と本州の西端あるいは九州の東側を結ぶネットワークが、16世紀後半に様々な変化の局面を迎えたことが明らかになった。中でも秀吉政権は、西国をその傘下に収めるにあたり、単に地域権力の主体による従属を求めたのではなく、それらが管理してきた流通に関わるネットワークをも一元掌握することを試みたのではなかったかと考える。そしてその掌握の過程で、一時に過ぎないにせよ、南蛮貿易に深い影響力を持つイエズス会士達が役に立ちうる存在として重要視され、その活用が模索されたのではなかったろうか。そのような意図のもと、秀吉政権にとって管理しやすい対外貿易港として、「下関の長崎化計画」も生じたのかもしれない。

とはいえイエズス会士達も、単に布教に好意的な権力に依存するのではなく、大友氏の敗色濃い時期に、薩摩の島津氏との交渉を重ねるなど、権謀術数を駆使して戦国時代を生き延びようとしていた。本稿の執筆を通して、あらためて南蛮貿易の国内流通の面におけるイエズス会の影響力の多面性を再認識できた。

註

(1)——本稿は、2018年11月23日に国立歴史民俗博物館において行われた基幹研究「中世日本の国際交流における海上交通に関する研究」第7回共同研究会で発表した「16世紀イエズス会宣教師報告に見る日本の海上交通」を原稿化したものである。2019年9月には本稿の原稿を編者に送付した。したがって、本稿の内容については、2018年中に既に完成し、発表されたものであることを明記したい。イエズス会の日本での活動報告は、戦国期の日本の諸事情について貴重な情報を提供する歴史資料として、国内外の歴史研究者に広く利用されてきた。とりわけ通称「エヴォラ版」と呼ばれる、ポルトガル南部の町エヴォラで、1598年に編纂・印刷された書翰集 (*Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreverão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa des do anno de 1549. até o de 1580: Primeiro [segundo] tomo. Euora, por Manoel de Lyra, 1598* 以下Evoraとのみ記す)は、松田毅一の手で、『16・7世紀イエズス会日本報告集』(同朋舎、以下『日本報告集』として略記)として邦訳され、有益な情報を提供している。主な先行研究としては山内譲『中世瀬戸内海の旅人たち』(吉川弘文館、2004年)に同種の史料を用いたものがあるが、本報告では、主にエヴォラ版翻訳(上掲書翰集第3期1~7)を通読して得られる情報の抽出をおこなった上で、文意や訳に正確性を要する箇所などは、必要に応じて手稿原本または古写本を参照した。また導入となる第1節では同じ史料を用いる箇所もあるが、本稿の第2節以降は山内書と内容的にはほとんど重複しない。

(2)——松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』風間書房、1967年、645~805頁。神田宏大・大石一久・小林義孝・撰河泉地域文化研究所編『戦国河内のキリシタンの世界』批評社、2016年。

(3)——レグアの内容は時代によって変化するが、この時期は1レグア4,180メートルに相当。

(4)——この箇所は、Evora, fls.140-143vを参照。邦訳は『日本報告集』3-2, 181~182頁。

(5)——フロイス『日本史』1部第56章(邦訳第3巻)

では、この時堀江に、京都から豊後へ下向中の賀茂在昌が訪ねてきたことが記される。賀茂在昌は公家で陰陽頭であったが、キリシタンに改宗した。

(6)——同上フロイスに拠れば、この港は「坂越さこし」(兵庫県赤穂市)である。

(7)——『日本報告集』3-2, 268~270頁。

(8)——伊予の有力領主・河野氏の拠点の一つ。河野氏家臣の瀬戸内海賊・来島村上氏の拠点港。

(9)——『日本報告集』3-2, 321頁。

(10)——『日本報告集』3-2, 292頁。

(11)——岡美穂子「フランシスコ・カブラルの長崎発書翰(1572年9月23日付)にみる岐阜」『岐阜県立歴史博物館紀要』21号、35~42頁、2013年。

(12)——Biblioteca Real Academia de la Historia, Madrid, 9-2663, fls. 85r-107v。フロイスは『日本史』において、同書翰を情報源としたと思われる一章(原文版第1部95章、邦訳版第4巻42章)を執筆している。

(13)——『日本報告集』3-4, 243~245頁。本書翰はエヴォラ版には収載されず、松田氏監訳書では、京都大学付属図書館所蔵のイタリア語写本が底本とされた。筆者は本史料の原文確認にあたり、次のものを参照した。Archivum Romanum Societatis Iesus (ARSI), JapSin 7-II, fls.207r-216v。

(14)——宣教師史料を用いた塩飽の重要性は、前掲山内書(87頁)でも述べられる。ここで挙げるのは塩飽諸島に関する記述のごく一例であり、他にもかなり多くの記述がある。

(15)——『日本報告集』3-5, 40頁。

(16)——『日本報告集』では、「代官」と訳出されているが、feitorは商務を扱う代表者である。

(17)——本書翰は、日本語訳、さらにはエヴォラ版では不確かと思われる綴り等があったため、ローマイエズス会文書館所蔵の同時代写本を参照した。ARSI, JapSin, 9-I, fls.1-6v。

(18)——『日本報告集』3-6, 38頁。

(19)——この部分、『日本報告集』では、「枝の主日の前の金曜日」と訳出されるが、「枝の主日の前の金曜日」

にはいまだ淡路島の手前にいたため、同日のはずはなく、エヴォラ版の間違いに依拠する誤謬であろう。

- (20)——『日本報告集』3-5, 286~287頁。
- (21)——九鬼嘉隆建造の6隻の黒い大船と滝川一益建造の白い大船1隻を指す。
- (22)——伊勢大湊は、造船業で栄える。『三重県史』資料編(近世1), 1993年。
- (23)——*tiros de artelharía grossa*『日本報告集』では、この部分が訳出されていない。
- (24)——同書翰は、フロイスの1578年9月30日付書翰に収載される。『日本報告集』3-5, 76頁。
- (25)——竹内理三編『増補続史料大成 多聞院日記』三, 臨川書店, 1978年, 21~22頁。
- (26)——『日本報告集』3-6, 281頁。
- (27)——神田高士「ロシア国立軍事史博物館所在の子砲式後装砲について」『東京大学史料編纂所画像史料解析センター通信』第56号, 2012年。
- (28)——『日本報告集』3-5, 75頁。
- (29)——肥後高瀬は九州のターミナル港としてのみならず、対外交渉拠点としての重要性も着目され、研究が進んでいる中世の湊である。『玉名市歴史資料集成 高瀬湊関係歴史資料調査報告書』1~2, 玉名市史編集委員会(1987~88), 森山恒雄『豊臣氏九州蔵入地の研究』吉川弘文館, 1983年。
- (30)——『日本報告集』3-4, 12頁。
- (31)——『日本報告集』3-7, 140~141頁。
- (32)——松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』中央公論社(ソフトカバー)第1巻, 221~222頁。
- (33)——『日本報告集』3-7, 120~121頁。
- (34)——『日本報告集』3-7, 138~141頁。
- (35)——『日本報告集』3-7, 45~46頁。
- (36)——『日本報告集』3-7, 46頁。
- (37)——『日本報告集』3-7, 125~132頁。
- (38)——黒嶋敏『海の武士団 水軍と海賊のあいだ』講談社選書メチエ, 2013年。
- (39)——『日本報告集』3-7, 120頁。
- (40)——須田牧子『中世日朝関係と大内氏』東京大学出版会, 2011年。
- (41)——『日本報告集』3-7, 168~169頁。
- (42)——『日本報告集』3-7, 177頁。但し、本書翰の訳者には、小早川秀秋と毛利秀包の混同が見られる。
- (43)——脇田修『日本近世都市史の研究』東京大学出版会, 1994年。
- (44)——天野忠幸『増補版 戦国期三好政権の研究』清

文堂, 2015年。

- (45)——豊田武『豊田武著作集 封建都市論』吉川弘文館, 1983, 178~179頁。
- (46)——川村信三「ザビエル上洛事情から読み解く大内氏・堺商人・本願寺の相関図—天文年間(1532-1554)「瀬戸内海リンク」の存否をめぐって」『上智史学』55, 2010年。
- (47)——橋詰茂『瀬戸内海地域社会と織田権力』思文閣出版, 2007年。
- (48)——松田毅一・川崎桃太前掲書, 236頁。
- (49)——1574年に相国寺で催された信長主催の茶会に招かれた有力堺商人10名の中に、油屋常琢の名が見られる—藤本誉博「室町後期から織田権力期における堺の都市構造の変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』第204集, 2017年。常言と常琢は同一人物と言われる。
- (50)——1568年, 油屋の寄進により妙国寺開山。
- (51)——『信長公記』巻12「法花・浄土宗論の事」
- (52)——町泉寿郎ほか「曲直瀬養安院文書の研究1」町泉寿郎「曲直瀬養安院家と朝鮮本医書」『日本思想文化研究』第2巻第1号, 2009年。
- (53)——曲直瀬道三の入信経緯については、フロイス『日本史』5巻, 第59章参照。
- (54)——沢田章編『日本画家大辞典』啓成社, 1913年, 211頁。
- (55)——曲直瀬玄淵(1636-1686)は、江戸幕府に仕えた医官。
- (56)——朝岡興禎, 太田謹補『増訂 古畫備考』巻下, 弘文館, 1904年, 1749頁。
- (57)——飯塚米雨他編『日本畫大成 日本画人名辞典』東方書院, 1931年, 395頁。
- (58)——その数奇な運命については、拙著(ルシオ・デ・ソウザと共著)『大航海時代の日本人奴隷』中央公論新社, 2017年に詳しい。
- (59)——朝岡興禎前掲書, 1802頁。
- (60)——鳥津亮二『小西行長』八木書店, 2010年, 4~5頁, ほか。
- (61)——小西が本来薬種商であったことを考えれば、「タキノ」の縁者は京都の薬種商「談義者トマス」であった可能性も考えられるが、実証は難しいであろう。
- (62)——岡美穂子『商人と宣教師 南蛮貿易の世界』東京大学出版会, 2010年, 第7章参照。
- (63)——1572年9月23日付, フランシスコ・カブラルのイエズス会総長宛て書翰, BRAH 9-2663, 85r-107v。
- (64)——南海路に関しては、九州=畿内間の通常ルート

である瀬戸内航路に比して、「非常時」のルートであったと考えられ、記録は乏しい。伊藤幸司「入明記からみた東アジアの海域交流—航路・航海技術・航海神信仰・船旅と死について—」中島楽章・伊藤幸司編『東アジア海域叢書 寧波と博多』汲古書院, 2013年, 200～201頁。それゆえ、これら宣教師書翰もまた、南海路の詳細を知る手掛かりになり得る。

(65)——『日本報告集』3-6, 21～22頁。

(66)——中世の坊津については、次の論文を参照。橋口亘「中世港湾坊津小考」橋本久和・市村高男編『中世西日本の流通と交通』高志書院, 2004年。藤田明良「中世後期の坊津と東アジア海域交流—「一乗院来由記」所載の海外交流記事を中心に」九州史学研究会編『境界からみた内と外 九州史学創刊五〇周年記念論文集』下巻,

岩田書院, 2009年。

(67)——坊津一乗院を指すと考えられる。この記述の後半に、「妖術師」とある。一乗院は、根来寺の別院という扱いで、春日明神, 白山権現, 熊野権現, 三部権現などが祀られていた。赤塚祐道「薩摩坊津一乗院と紀州根来寺」『真言密教と日本文化』2007年, 大正大学真言学豊山研究室加藤精一博士古稀記念論文集刊行会。

(68)——『日本報告集』3-5, 16頁。島津義久が, 山川の具体的な名前を挙げたのは, すでにポルトガル船が入港した前歴に加え, 坊津(一乗院)や志布志(宝満寺)のように, 既存の宗教勢力が強い地域を避けた可能性もある。

(69)——『日本報告集』3-5, 59頁。

(70)——『日本報告集』3-6, 100頁。

(東京大学大学院情報学環, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2020年1月27日受付, 2020年7月9日審査終了)

The Sea and Local Powers: An Analysis of the Kyushu-Kinai Route based on Missionaries' Reports

OKA Mihoko

This paper analyzes in detail the Kyushu-Kinai Sea Route in the late 16th century based on the reports made by Jesuits sent to Japan in the 16th century. This study principally refers to *Juroku-shichiseiki Iezusukai Nihon Hokokushu (Collection of Jesuit Reports from Japan in the 16th and 17th Centuries)*, translation supervised by Kiichi Matsuda, but also consults the original reports when any question arises as to spelling and translation. According to the analysis of these reports, Jesuits stopped at port towns while traveling by passenger boat through the Seto Inland Sea. In some port towns, local people offered their homes for Jesuits to stay in on a regular basis. These homes also served as hubs of missionary work. Moreover, Jesuits sometimes traveled through the South Sea Route, especially when the Seto Inland Sea region was involved in conflicts and fell into an unstable state. There were many pirates along the Seto Inland Sea Route and the South Sea Route. Jesuits also described in detail their encounters and negotiations with pirates in the reports. In addition, these reports include detailed information on seamen and specifications of boats carrying Jesuits. In particular, it is worth noting that Otomo Sorin made a direct agreement with the master of a large ship who was born in Osaka and based in the Shiwaku Islands to transport missionaries to the Kinai Region. This indicates that merchants and seamen involved in the commerce along the Seto Inland Sea Route acted actively beyond the territorial borders. Although most of the previous studies of the Namban trade based on the historical documents of the Society of Jesus examined trade between Macao and Kyushu, this study rather focuses on how merchants from Kyushu and other parts of Japan, especially from the Kinai Region (Kyoto and Sakai), were involved in that trade. In particular, Section IV examines the situations of the Konishi family before and after their conversion to Christianity and the activities of Christian merchants of Kyoto involved in the Namban trade and provides new findings on kinship-based networks. These findings also imply that the reasons for conversion of Kyoto merchants included not only the financial benefits they expected from the Namban trade but also their craving for advanced Western knowledge.

Key words: Jesuit Reports from Japan, Seto Inland Sea, South Sea Route, domestic distribution networks for imports, religious and trade networks
